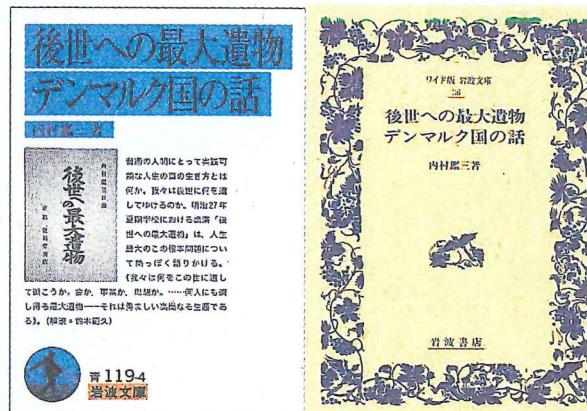


公共事業と教育-学びの場から考える-

No. 14

内村鑑三は、将来世代に遺すべきものとして
インフラ整備をあげている



内村は、「われわが五十年の生命を托したこの美しい地球、この美しい国、このわれわれを育てくれた山や河、われわれはこれに何も遺さずに死んでしまいたくない、何かこの世に記念物を遺して逝きたい、それならばわれわれは何をこの世に遺して逝こうか、金か、事業か、思想か、これいすれも遺すに価値あるものである、しかしこれは何人にも遺すことのできるものではない、まだこれは本当の最大の遺物ではない、それならば何人にも遺すことのできる本当の最大遺物は何であるか、それは勇ましい高尚なる生涯である」と語っています。勇ましい高尚なる生涯、金、思想とあわせ、将来世代に遺すべき価値あるものとして（公共）事業、す

内村鑑三（1861—1930年）は、札幌農学校（現北海道大学）時代、「Boys be ambitious (少年よ、大志を抱け)」で有名なW・S・クラーク博士に感化され、キリスト教信者になり、その後、福音主義信仰と時事社会批判に基づく日本独自のいわゆる無教会主義を唱えました。

札幌農学校の同級生には、アメリカ合衆国で『Bushidō (武士道)』を刊行した新渡戸稻造や、函館港築堤・小樽築港などを設計し、後に「港湾工学の父」と呼ばれた廣井勇がいます。

内村は、その生涯において、國土教育の教材に相応しい著書『後世への最大遺物』、『デンマルクの話』、『地人論』を遺しています。

内村鑑三が著した国土教育の教材 後世への最大遺物・デンマルク国の話・地人論

基盤がなければ、国ratへの働きかけがなければ、歴史も存在し得ないということです。現代に生きる私たちの世代も、国土に対して働きかけを続け、将来世代に対して、より良い社会基盤を引き継いでいかなければなりません。

人論」は、世界地理と並んで使して、日本が西洋文化の媒介者であることを示しています。この物記は、「デンマークの戦後」というタイトルで、戦後の国語教科書にも採録された。

して、良き田園となりました。「2013年版世界幸福度報告（World Happiness Report 2013）」によると、インマークは世界で一番幸福な国となっています。

公共事業と

教 育

学びの場から考える

国土学アナリスト 森田 康夫

0014

なわちインフラ整備をあげて、
るのです。